
聖処女ケティ

鍋木恵梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖処女ケティ

【Nコード】

N3176K

【作者名】

鈴木恵梨

【あらすじ】

とある田舎村でのキリスト教的“奇跡”の寓話。ジョン・スタンベックの同名作品のインスパイアだかパロディだか。

つまらぬ前置き

「……『聖処女ケティ』を訪ねてお参りに？」

「ご案内いたしましょう。聖骨は大事に礼拝所に納めてございますよ。」

「……ええ、ええ！もちろんでございますとも！」

この村の者はみな聖女を崇めております。県の宗教委員会や教会庁は、決めつけてますけどね。聖女の奇跡なんて、あたしたちの無知な迷信だつて。

「……そうですとも！」

お偉い方々は分かっちゃいねえんです。しんじつ、婦人病に効験あらたかなのですからね。疑うならそこいらのおかみに聞いてもらなさいな！」

善良そうな太り気味の細君は、一気にまくしたててくれた。

僕は今、かの礼拝堂でひざまずいている。

質素を通り越し、貧相と評しても過言のない礼拝堂。

信仰の場を主張する、十字架や手なぐさみの『受胎告知』のテンペラ画。これがなければ僕は、ここを物置とかん違いしていただろう。

中でも目を引くのは金と銀の装飾を施した箱だ。真紅のサテンの上に据えられている。おそらくは、この村で最も価値ある宝ではないだろうか。ただ、中に入っているものは骨。しかも隣村の修道院から目のかたきにされている代物だ。盗むもの好きはいやしないだろう。

さらには箱の横に捧げられた白百合の花束。衆目をひく、というより鼻を刺激すると言った方が正解だ。狭く閉ざされた礼拝堂。充

満した薫香に酔いそうだ。純潔を示す百合　しかも高価なオリエ
ンタル・リリー　を惜しげもなく捧げているところ、村人たちの
聖女への高い宗教心は相当に神聖なるものらしい。

それらを観察しつつ、そもそも、と僕は心中、弁明した。

僕は気ままなツーリングの真っ最中。偶然この町を通りかかり、
親切なマダムにお茶をご馳走になっただけの縁なんだ。

それがどうだ。「聖女」とひとこと口にするや、聖女の何たるや
の素朴なる講義を受けた。聖女参拝と解釈され、素朴な好意をもつ
て礼拝堂まで連れ込まれた。あげくの果てに……僕は聖箱へのキス
を強要されようとしているのだ！

マダムは敬虔なる祈りを捧げる。

「聖女の祝福のあらんことを」

おそらく僕は生涯、婦人病には無縁だろう。僕は、彼女からい
かなる祝福を受けるというのだろうか？

僕は聖箱を自らの胸に抱擁し、マダムの講義を反すうした。そし
て次いとなり村の修道士たちが語った「聖処女の物語」を思い起
こし、複雑な心境に陥る。

村人は彼女をこう呼ぶ　「聖処女ケティ」。

それは聖処女の奇跡の物語。

興味あらば拝読頂きたい。

前編

これは百年も前の話。

あの村には、救いがたい性悪な男がいた。

修道僧の托鉢を足蹴にし、教会への十分の一税も鼻であしらった。村人をばか呼ばわりし、村の集まりは愚者の踊りとあざ笑った。彼は、本当に性悪だった……ある修道僧が沼にはまり、手にした塩袋を手放さなかったために溺れ死んだことがあった。そのとき、彼は笑い死にしそうなほど笑った。笑い過ぎで腹がねじれ、寝込んでしまったほどだ。その笑いもこの上なくいやらしく下卑たもので、興に入れば入るほど、悪霊が乗り移ったかのごとき表情を浮かべ、しやつくりのような奇矯な叫びをあげるのだった。

その男に育てられたケティもまた、性悪な娘だ。彼女は、自分の家の鶏を男に断りもなく食う。そして鶏がいなくなれば、今度はあひるを食うのだ。

男は家畜小屋の鍵を頑丈なものに変えた。そしてケティを閉じ込めた。それからというもの、男の家では家畜は食い殺されなくなった。だが近隣の家では時々、夜が明けると一匹、消えるようになった。

村人たちは当然、文句を言い立てた。

だが、非難にもかかわらず、男は例の奇妙な笑いをふりまき、「朝にはきちんとここにおる、どうして捕まえられないのだ。彼女は美しく頭が良い、自慢の娘だ」

村人たちは「まるでなをかねで捨てるよう」なあしらいを受けたという。

男にとってケティは目に入れても痛くない、可愛い娘だったようだ。

そんな娘もまた雌である。時、来たればその身に子を身ごもるの

である。

ケティのおなかはどうどんふくらみ、やがて仔を産んだ。性悪な娘もついには母親となったのだ。ケティは、彼女の仔を愛しそうに舐め、ほおずりをしてみせた。それはまさしく母親だった。彼女は自身のこれまでの生き方を変えたことを公表するかのようになり、素晴らしい母性愛を発揮した。

だが、それもつかの間のこと。ある嵐の後の朝、その仔はいなくなっていた。男は、ケティの素知らぬそぶりと邪悪な瞳に問えなかった。

「お前はなにをしたのか」

とは……。

そこに修道僧コリンと我が大叔父ポールが通りかかったのは、全く偶然の賜物だ。

いやこれもまた、神の与え給うたる試練やも知れない。

コリンはずんぐりの額の広い、柔和な僧だった。ポールは薄肉で鋭い目の、屈強な僧だった。また、コリンを評して人は善良な人だといった。彼は「神の祝福のあらんことを」が口癖であった。ポールを評して人は立派な人だといい、彼は全身で神への絶対的服従を表わしていた。

二人は十分の一税の取立てに派遣され、村を訪れた。しかしながら、彼らはいくばくかでも男から収納できるとは期待していなかった。やるだけやってみよう、温厚なるコリンが説得を重ね、だめなら厳格なるポールが地獄について語る心積りで、男の元を訪ねた。

ポールは男に教戒を施した。

「なあ、おまえさん。今までのように罪業を重ねるのかい？ 地獄で蛇に咬みつかれ、しびれる毒に酔い、炎に巻かれ灰になり、再び蛇が絡まれないというのかね？」

男は笑い始めた。地獄の罪人の悲鳴さながらに。

コリンは懊悩に苦しんだ。　　いかな地獄を語れど、この罪深き男は聞き入れはしない。この男の善行への頑迷さは、どこから生み

出されるものだろう。てんで地獄を恐れやしない。魂を売り渡したか、はたまた地獄より来た者なのか。その証拠にどうだ、この男の笑うさまときたら！

やがて男は、笑いをのどの奥で押し殺すと宣言した。

「金はねえ。娘を連れてゆくがええ」

「娘？」

コリンは首を傾げた。

「そうだ、自慢の娘だ」

男に誘われ、修道僧たちは娘の姿を確かめた。

美しい立ち姿に整った顔立ち。つぶらな双眸には三人の姿が映る。瞳の色は、迷いなき邪心と秀でた知性をたたえる。

ポールは一目で娘に、神に敵対する悪魔の影を見た。

コリンは一目で娘の値段をはじき出すことができた。

なるほどこれは「自慢の娘」と称するに値する。即刻かつ瞬時にして、修道僧たちは男の言い様を認めた。そして各人とも、娘を修道院に連れて行く価値を見出したのであった。

かくして娘は男の元を離れ、修道僧に従うこととなった。神より賜った靈魂を育んだ地から去り、神に祈り神に奉仕する聖なる家へと赴く、運命的瞬間であった。

神の家は、娘を待っていた。

特に修道院長は、手ぐすね引いて待っていた。もともと彼が心待ちにしていたのはポールとコリンの取り立て結果だが……いや、これは枝葉末節の話。とにかく院長は、執務室を訪れたポールとコリンを席を立てて両手を広げて出迎えた。そしてお勤めの時間より真面目な顔で「やあ首尾は」と尋ねて間もなくのこと。彼は、人格者コリンの傍らの、珍しい来訪者に気付いたのである。

「これはどうだね」

院長は率直かつ単純な反応を見せた。

修道僧コリンはかくがくしかじか、時系列に順を追って説明した。

院長は目を輝かせて「ドル」が云々、「セント」があれこれと、独り言を繰り返した。次にポールは、ケティは悪魔を宿した哀れな娘であると説明した。院長はさらに云々と空返事を繰り返す。

そして悪魔の娘ケティ、彼女はつまらなそうに鼻を鳴らしてみせた。

ポールとコリンは院長の肝入りでしばらくの間、娘を任されることとなった。コリンはひとつ仕事が増えたとぼやいたものだ。だが一方、ポールは与えられた仕事を喜んだ。「よくぞ我に与えたもう」。

ケティ、悪魔つきのケティ。

拙僧がお前の悪魔を払ってみせよう。

改心の引導を渡してみせよう。

ポールは神への絶対的服従を改めて誓った。彼にとってケティとの出会いは、その強き服従の程を具現化する、最高の機会であったのだ。

「何をしようというんだい、ポール！」

「決まっているだろう、悪魔抜いさ」

ポールは堅い意志をもって断言した。右手には磔刑のキリストを戒めた「いばら」、左には「聖水」を手になっている。

コリンは悲鳴を上げた。

「その必要はないのだよ、ポール！」

修道僧コリンにおける神への奉仕は、彼の同輩とは全く異なったものだった。その実、彼はポールよりも確実に院長の崇高な目的を理解していた。ゆえに彼はポールを引き止めようと試みた。だが、ポールの敬虔なる熱情は冷めることなく、逆にゆるぎない強固さを保ちさえたのである。

悪魔よ、去れ！

その何にも屈せぬ強き信仰を神はお認めになったのか。奇跡は…訪れた。

瞳に宿す邪悪な闇、それが彼女から跡形もなく消え去ったのだ。

それどころか、つぶらな瞳は潤み、その虹彩は星のように輝いてさえいた。彼女の姿はまさに清純そのものであった。

そう、彼女は無垢なる神の乙女へと生まれ変わったのだ。この出来事を「奇跡」と呼ばずして、何を奇跡と呼ぼう？

後編

修道院の庭の片隅たった一エーカーの花壇で、コリンは薔薇を育てていた。その薔薇が一株枯れた時、コリンはたいそう落胆したのだが、その時驚くべきことが起こった。傍らに連れていたケティもまた、薔薇を見つめ、はらはらと涙を流したのである。

「彼女は素晴らしい！」

居合わせたS氏は彼女の態度に、大いに感銘を受けた。

S氏は名士であり、その態度は常に「紳士」であった。古い村人たちはS氏を「領主さま」と呼ぶ。政府から絞り上げられるよりは、この紳士が本当に「領主さま」であつた方がましではないか。そう思う民が彼をそう呼ぶらしかつた。だが実際、本当に彼が「領主さま」として徴税権を得たならば、どれほどの紳士たりえただろう。つまらぬ邪推ではあるが……ともあれ彼は、立派な紳士とみなされていた。

「彼女にはまた会えるのかね」

「いいえ、ミスター」

コリンは小さく首を振り、残念そうに語った。

「恐らく彼女も近いうちに、彼女の多くの仲間と同じ運命をたどることでしょう」

S氏は館に帰り、晚餐にて夫人にその話を説いて聞かせた。いつもは退屈な夫の話も、この日は格別であつたとみえる。社交家の夫人は知人をアフタヌーン・ティーの席に呼び、その興味深い話を語って聞かせた。その知人もかじりかけのスコーンをそのままに聞き入っていたというから、かなりお気に召したものと思われる。そして知人は知人に話し、召使が耳に入れ、お昼の噂話に華を咲かせ、瞬く間に娘の涙は「村の奇跡の伝説」として語られるようになったのである。

話を聞きつけた人は、彼女を一目見ようと修道院の教会を訪れた。

そして訪れた人々のほとんどは、彼女のつぶらな瞳に癒された、と語った。

となると無碍に彼女を捌く、いや裁くことはできない。

なにしろ彼女はすべてを愛し、人々に愛される存在となつたのだから。

「修道士ポール、君は全く余計なことをしでかしてくれた」

院長はあてがはずれたことを悔恨し、怒りの矛先をポールに向けた。神の奇跡の召人・ポールは自らの神の奇跡を称えた。善行を知らず育ち、悪魔に憑かれた娘。彼女を救った神がいに偉大であるか。いかに慈悲に満ちているか。院長はますます感情を荒らげた。

コリンは善良である。その善良さをして、院長を説得した。奇跡がいかに人に感銘を与えたか。人々がどれだけ神の恩寵を求めているか。今、人々は間違いなく、教会に集い、その美しい姿に感動している。彼らは彼ら自身の目で、神の存在を確かめたいと欲しているのである。そして　これは院長にとって最も重要だった　自らの持てる財産を神の娘に捧げることによって、厚い信仰心を証拠だてようと欲しているのである。

院長は第一に神を敬愛し、第二に紙を愛した。紙を愛するにも、印刷された数字の値が大きいほどより深かった。モーセは「姦淫する事なかれ」と戒めたが、「蓄財する事なかれ」とは語っていない。戒律は遵守せり。至極、彼の愛は理屈と教理に適っていた。

院長は、娘に対するかねてよりの予定を取り消すことにした。彼女の行く末に見合う神への奉仕を、彼女は行っているのだから。

こうして彼女は修道院からも認められた。

すべてを愛し、人々に愛される「神の娘」として。

そんなある日のこと。

あの男が修道院を訪れた。無論、礼拝のためではない。男は背中をねじ曲げ、落ち着きのない様子で凄んで見せた。やい、あれは俺の娘だ、返しやがれ。

ポールとコリンは慌てた。娘がこの男の怒鳴るさまを聞いているのではと、冷や汗をかいたのである。幸いにも娘は出払っていた。ひとつ向こうの村へ連れられ、神の奇跡をその身をして説いていた。とにかくこの男を追い払う以外にない。ポールは説得した。彼女は幸せに暮らしている。おまえさんこそ悪魔憑きなのだ。

男いわく。なにが悪魔だ。あれは俺の娘だ、返しやがれ。

コリンが説得した。これで今日は引き取ってもらいたい。が。「神の血液」を説得の間に手渡した。「神の血液」の管理はポールの奉仕作業であった。院長にどう報告すればよいかを考えるだけでよく、彼らにとって最も迅速かつ適切な処置であった。

しかし、男にとっては適切ではなかったらしい。いや、これも残酷なる神の差配なのか。教会からの帰路、あの男は帰らぬ人となった。

修道僧たちがその事件を知ったのは、明くる朝のことだった。男は道々で「神の血液」を含み、泥酔し、ついには沼にはまったのだという。かつて塩袋を持った修道僧が犠牲になった、あの沼だ。男は塩袋を手放さなかった修道僧をあざ笑った。しかし今回、彼が沼から引き上げられた時、彼は酒壺を手に握りしめていたという。しかも酒壺は修道院の印章入りだった。ゆえに発見者は、院長に知らせたのだった。

しかし、ポールとコリンは、その事件を「すぐさま知らされた」のではなかった。

その朝突然、ケティは脱走を決行した。

ポールとコリンが村じゅうを捜し回った末、かつて彼女自身が住んでいた小屋に立ち寄った。彼らは、彼女が悪魔憑きの男の元にいるとは信じたくなかったのだが……確かに娘はそこにいた。そして彼らはそこで、思いもよらぬ光景を目にし、事件を知ったのである。彼女は、世話になった男の抜け殻を前にうなだれていた。彼女を連れ戻そうとする、修道僧たちの必死の説得にも応じなかった。やがて彼らと娘との根比べになったが、彼女は朝陽を迎えれば涙をこ

ばし、夕暮れ前には悲しそうな声を上げた。

思えば 彼女はたった一人の家族を失ったのだ。しかも彼女は悲しみに暮れるばかりで、たった一人の家族をあのに、満足に送り出すことさえできないでいる。ポールとコリンは哀れな悪魔憑きに十字を切った。だがその祈りは、男を天国に導いたのであるのか。ケティに運命を従容と受け入れさせることが出来ただろうか。否、否！

ケティは人々を癒した。しかし今、彼女自身を癒せるものは、何一つとてない。なんとかかわいそうなケティ！

ポールとコリンは多くの村人の哀願を受けた。

「あの子を、そつとしてやっておくれ」

素朴な人情は彼女に大いに同情的だった。

彼らは教会に帰ることさえ、ケティにとつて良いことではない、と信じていた。ましてやかつての彼女のことは、誰ひとりとして口にしなかった。自分の家畜を食われたという、些細な過去などは。

「何が聖女だ」

聖なる娘ケティは戻って来ない。それを知るや院長は口惜しそうに地団駄を踏んだ。

「私が情けをかけなければ、捌いてローストか燻製になっていたのだぞ。この教会あつての聖女ではないか。それをまるで、私が牢獄の看守のように……あの恩知らずの雌豚め！」

やがて彼女は哀しみの間に朽ち果てて逝った。

彼女の骨は、村人たちによって大切に扱われた。かつての男の住みかには、彼女を称えて礼拝堂が作られた。

ただ、彼女を称えようにも「聖女」は不敬。教会と修道院長を憚りつつ、村人たちは彼女を親しんでこう呼ぶようになったという。

The Saint-virgin
Ketty（聖処女ケティ）

F
i
n
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3176k/>

聖処女ケティ

2010年10月8日15時23分発行